

“ウイルスとワクチンの戦い” ～コロナ感染第3波の中、イングランドにおける
ロックダウン解除と今後の注目点～ 2021年7月19日

関屋 宏彦*

7月12日、ジョンソン首相は、4週間延期したイングランドにおけるロックダウンのほぼ全面的解除を7月19日より実施することを決断した。この措置は、3月8日から実施してきたロックダウン解除に向けたロードマップの最終段階である第4ステップに該当するが、折しも、デルタ株を主因にコロナ感染の第3波が襲う中、一部の例外を除き法的規制を全面的に（“ビッグバン”）解除することとなるため、賛否両論が渦巻く中での決断となった。

日本でも、感染が急拡大し、7月8日にオリンピックを無観客で実施すると決定したのに対し、イギリスでは、7月11日、イギリスが55年ぶりの優勝をかけたサッカーのヨーロッパ選手権の決勝戦がWembley Stadiumで開催され、6万人の観客（収容能力10万人）の熱狂の中で開催された。コロナ禍の中での観客動員で、日英は際立つ対称を見せており、また、ワクチン効果を頼みとするものの、デルタ株による感染拡大の中での法的規制解除の成否は、欧米においても注目されている。

7月19日から実施されるイングランドにおける
ロックダウンの法的規制解除（ロードマップ第4
ステップ）の概要

- ・社会的接触の制限（現在は屋内での6人または2世帯、屋外で30人）が全て取り払われ、屋内外を問わず、どのような環境でも社交できる人数の制限解除
- ・ナイトクラブを含む全ての施設がオープン可能
- ・フェイス・カバーの着用義務は、全ての環境で解除。ただし、公共交通機関のような混雑した閉鎖空間や、普段会わない人と一緒にいるとき

- 等にはフェイス・カバーの着用を期待・推奨
- ・社会的距離の制限（2メートルまたは1メートルプラス）は解除
- ・政府による在宅勤務の指示を撤廃

また、海外旅行に関しても以下のとおり一部の法的規制を緩和

- ・赤信号国及び黄信号国（日本を含む）からの渡航者に対しては引き続き検疫規則を適用
- ・ただし、黄信号国からの渡航者で、イギリスのNational Health Serviceが投与するワクチンを完全に接種後14日間経過した人は、出国前検査及び帰国後2日目検査は必要だが、帰国後8日目検査と自己隔離を免除
- ・黄信号国への渡航を控えるという勧告も削除

ジョンソン首相が強調する「コロナとの共生を
目指すリスク管理の5つの要点」

ジョンソン首相は、6月までコロナ規制を解除する第4フェーズの実現日を“フリーダム・デー”と楽観的な見通しを示していたが、デルタ株による感染第3波により、今次のロックダウン解除について、“コロナとの共生を目指す”との慎重姿勢に転換し、下記の5点をリスク管理の要点として、補足説明を行った。

- ① 今後のワクチン普及促進:18歳以上の成人への2回の接種を9月中旬までに完了
- ② 法的規制の大半を解除し、自己責任による判断に移行。ただし、公共交通でのマスク着用等について、引き続き慎重な行動を期待（公共交通を管理するロンドンなどの地方自治体では、利用者に対し、マスク着用義務を課している）
- ③ 「テスト・トレース・隔離」に係る法的規制は

*在ロンドン、公益財団法人都市化研究公室 監事

残す。ただし、8月16日より、濃厚接触者のルールに関し、18歳未満の者とワクチンを2回接種した者については、自己隔離を免除。

- ④ 海外旅行時の隔離義務免除について、現在の“青信号国”からの帰国者に加えて、“黄信号国”（日本を含む）についても、ワクチンを2回接種した帰国者について、適用
- ⑤ 関連データを継続的にモニターし。9月12日にガイダンスをレビュー予定。事態が悪化した場合、ガイダンスを強化することはあっても、法的規制の再導入については、社会的・経済的・保健面での負荷が大きいため、極力回避。

判断の前提になるモニタリング4項目の動向

今次のロックダウン解除の政治的決断については、新変異種のデルタ株がもたらした感染第3波のもと、賛否両論があるため、モニタリング4項目について、政府見解の後に、反対意見、懸念事項を{ }内に記述した（参考データは、7月16日現在、イギリス全体）。

- ① **ワクチン普及状況**：第1回接種は全人口の69%、第2回接種は同54%に達した。7月19日には、対象となる18歳以上の成人全体（53百万人）への第1回接種を可能とし、また、その三分の二について2回の接種を完了。{高齢者に比べインセンティブの低い若年層へのワクチン普及が課題}
- ② **感染拡大とワクチンの有効性**：新規感染者数/日は、デルタ株による感染拡大によって、50千人/日超と前月上旬比6~7倍に急増。1月の感染ピーク、(70千人/日)に比べると、死者数/日はワクチン効果によって49人/日（同ピーク時

1,600人/日）、入院患者数も3,964人（同ピーク時37千人）に止まり、ワクチンの効果は顕著である。{ワクチン接種者でも感染する者があり、またロックダウン解除時点で、若年層など未接種者も多いため、感染第3波の渦中での解除はリスクが大きい}

- ③ **医療機関への負担**：上記のように、ワクチン接種促進に伴う免疫の壁により、感染増⇒入院患者増⇒死者増のリンクが弱まっており、医療サービスの持続は可能。{医療現場からは、そのリンクは断ち切られたわけではなく、入院患者および死者は増加傾向にある。また、長期間のコロナとの戦いによって、感染第3波のもとで医療機関の対応能力の限界と医療従事者の疲弊が懸念されている}
- ④ **新変異株への対応**：デルタ株は、従来型に比べ感染力が強いが、リスクの評価は十分に出来ている。{デルタ株および今後の新変異種の発生等、未知の事柄が多い中で、ロックダウン解除によって感染第3波を増幅させることはリスクは大}

感染第3波の渦中におけるロックダウン解除の決断の背景と今後の注目点

- ▶ 2020年3月、コロナ対策として法的な抑制策を講じた論拠は、医療崩壊しつつあったNational Health Serviceを守ることにあった。しかし、その後、ワクチンの普及効果によって、その懸念は軽減されつつある。
- ▶ その結果、コロナによって生じた保健サービスの持続性以外の多様なリスクーロックダウンによる住民のメンタルヘルスの悪化、教育の阻

2021年1月~7月のモニタリング指標の推移（イギリス全体）

(カッコ内)は 実施日	1月ピーク時 1月上旬	第1ステップ (3/8) 3月中旬時点	第2ステップ (4/12) 4月中旬時点	第3ステップ (5/17) 5月中旬時点	第4ステップ (延期) (6/21) 6月14時点	第4ステップ (実施) (7/19) 7月16時点
感染者数/日	70千人	6-7千人	2.5千人前後	2.2-2.4千人	7,742人	51,870人
入院患者数	37千人	11千人	3.5千人前後	千人前後	1,089人	3,964人
死亡者数/日	1,600人	200人	40人前後	10人前後	3人	49人
ワクチン普及率(全人口比, %)						
第1回接種	2020/末, 1%	34%	48%	55%	62%	69%
第2回接種	—	2%	9%	30%	45%	54%

害、経済・産業の疲弊等—のバランスを取る必要がある。

- ▶ 国による法的規制と監視からイギリスの伝統である個人の自由と自己責任による判断を重視。特に政権与党である保守党議員の圧力大。典型的な例として、マスク装着の習慣のなかった国において、法的な義務を課すことへの論争は、日本人から見ると奇異だが、想像に難くない。
- ▶ イングランド政府のウィットテ主席医務官は、「ロックダウン解除の決断を先送りすると、感染のピークが、インフルエンザの流行期の秋から冬シフトし、NHS にとっては大きな負荷となる」、と政府の決断を支持している。

ロックダウン解除の成否は、ワクチンの普及と効果の見極め、および感染を抑止する人々の警戒と慎重な行動にかかっており、9月12日のガイドラインのレビューまでの間、上記の4つのテスト項目の推移が注目される。

個人的には、ビッグバン型の法的規制の全面解除ではなく、感染経路を絶つうえで科学的エビデンスがあるマスクの法的な装着義務を残すなど、法的規制による市民生活への悪影響を与えない範囲で、規制の段階的撤廃を考慮すべきだったのではないだろうか？法的規制から自己責任による判断に転換する9月までの2か月間は、**British Common Sense** の発揮が試されることになる。

(以上)